

Complex Leech lattice と Sporadic Suzuki group

東大 理学部 吉荒 聡

(Satoshi Yoshiara)

§1 単純群の極大部分群分類問題

有限群のうちで essential な存在である有限単純群に関する様々な疑問—どの位存在するか, どんな部分群構造を持つか—等は有限群論の重要な推進力のひとつであった。有限単純群の分類が完成された今日, その部分群構造の決定は残された重要課題のひとつであろう。すなわち, 与えられた有限単純群を含む部分群, それらの交わり等, 等々を調べる必要がある。前者は次の問題(*)に帰着される。

(*) 与えられた有限単純群 G に対し, G の極大部分群の共役類の完全代表系を求める。

(*) はごく自然な問題ゆえ, 群論創始以来数多くの研究がなされている。

$L_2(8)$: Dickson [8]

$L_3(8), U_3(8)$; Bloom [1], Hartley [13], Mitchell [7]

$Sz(8)$: Suzuki [21]

$Sp_4(8)$; $q=odd$ Mitchell [18], $q=even$ Muene [19]

$G_2(4)$; Butler [3], Peterson-Tchakerian [20], Wilson [24]

$G_2(8)$; $q=even$ Cooperstein [6],

${}^2F_4(2)'$: Tchakerian [22]

$L_4(8)$: $q=even$ Muene [19]

Mathieu 群 $M_{11}, M_{12}, M_{22}, M_{23}, M_{24}$

Chang-Choi および Conway [5]

HS : Magloveras [16]

J_1 : Janke [14]

J_2, J_3 : Finkelstein - Rudvalis [12], [11]

$M_c, \cdot 3$: Finkelstein [10]

H_e : Butler [2]

筆者は sporadic simple group Suz に対する問題(*) を考え
次の結論を得た。 [26]

Theorem Suz の 極大部分群 の 共役類分割の 完全
代表系は 次のリストに含まれる。

$2^{1+6} \cdot U_4(2), 2^{2+8} \rtimes (A_5 \times \Sigma_3), 2^{4+6} \rtimes Z_3 \cdot A_6,$

$Z_3 \cdot U_4(3) \cdot Z_2, 3^{2+4} \rtimes Z_2(A_4 \times E_4) \cdot Z_2, 3^6 \rtimes M_{11},$

$(2^2 \times L_3(4)) \cdot \Sigma_3, (3^2 \times A_6) \cdot Q_8$

$(A_5 \times A_6) \cdot Z_2, M_{12} \cdot Z_2, J_2 \cdot Z_2, U_5(2), G_2(4),$

* $L_3(3)$, Z_2 (2-class), * $L_2(25)$, * A_7

このうち * EPのもの以外は確かに存在する。

Notation 上記において, p^n は order p^n の elementary abelian group, Z_m は order m の cyclic group, p^{a+b} は $P' \cong P^a$, $P/P' \cong P^b$ なる special group, 2^{1+b} は negative type の extra special 2-group (order 2^b) とおろす, Σ_n , A_n は n 次 対称, 交代群, Q_8 は order 8 の quaternion group.

注意: Wilson は Computer を用いて上記の3つの * EP の subgroup の存在を示した。[24]

筆者の知る所では, 次の単純群についても右記の人々が問題(*) と考察中 ないしは 解決した由である。

Suz	Wilson [24], Yoshizawa [26]	決定
•1	Curtis [7] + Wilson [25]	決定
•2	Wilson	(多分決定)
$G_2(8)$	$\delta = \text{odd}$ Ed Migliore	(多分)決定
${}^2F_4(2^{2m+1})$	John Sarlio	
L_4	Andrew Waldman	
$O'N$	Yoshizawa	Maximal local は決定

なお, Fischer の群 F_{22} , F_{23} については特別な形の subgroup の存在が示されている。(Enright [9])

以下、本稿では Complex Leech lattice 及び その自己同型群の factor group としての sporadic Suzuki group の定義 (§2) より始め、その基本的性質を幾つか紹介する。 (§3) §3 の内容は大体においては新しいものではないが、ここに述べる形で書かれたことは無いので (Complex Leech lattice を扱った論文としては Lindsey [15] が唯一のものがある。) "Complex Leech lattice Λ " の意味を込めて、まとめしておく。(証明等詳細には [27] 見よ。)

§4 では §3 で準備した Complex Leech lattice の解析を通じて得られる 顕著な 3-local group の幾つかを記述する。

なお、§3 で見るように Complex Leech lattice の係数制限は Real Leech lattice として良く知られたものであるが (例えば Conway [5]) Complex Leech lattice 自身がある $\mathbb{Q}(i, j, k)^6$ の $\mathbb{Z}[i, j, k, \frac{1}{2}(1+i+j+k)]$ -module の係数制限となっている。(ここで $\mathbb{Q}(i, j, k)$ は \mathbb{Q} 上の 4 元数環。) この module Λ (Quaternionic Leech lattice とよぶ) に対応する群は $G_2(4)$ であり、 Λ を通じて $G_2(4)$ の諸性質を解明しると共に、 $G_2(4) \cong S_3$ となるから、 S_3 自身の subgroup の構造決定にも深くかかわってくる。この辺の事情の詳しい解説は Wilson [23] または [28] を参照されたい。

§ 2 基本概念の定義

Notation

$\Omega := \mathbb{F}_{11}$ 上の projective line $= \{\infty, 0, 1, \dots, 10\}$

$Q := \mathbb{F}_{11}$ の平方元 $= \{x^2 \mid x \in \mathbb{F}_{11}\}$

$N := \Omega - Q$

$i \in \mathbb{F}_{11} = \{0, \dots, 10\}$ に対して $N_i := \{n-i \mid n \in N\}$

$Q_i := \{q-i \mid q \in Q\}$; $N_\infty := \Omega$ とおく。

\mathbb{F}_3 成分の 14 行 12 列 vector 全体のなす空間を \mathbb{F}_3^{12} と書き, natural basis を Ω i index 付け

$\{e_\infty, e_0, \dots, e_{10}\}$ とする。 $\mathbb{F}_3^{12} \ni X = \sum_{i=\infty}^{10} x_i e_i$ と

$(x_i)_{i=\infty}^{10}$ と書き, $\{i \in \Omega \mid x_i \neq 0\}$ を X の support,

$\{i \in \Omega \mid x_i = 1\}$ を X の positive support, support の濃度を

Weight とよぶ。 また $X \subseteq \Omega$ に対して $\sum_{x \in X} e_x$

のことと, e_X と略記する。

(定義 1.) $C_\infty := e_\Omega = (1, \dots, 1)$

$C_i := e_{N_i} - e_{Q_i} = \underbrace{(1^i)}_{N_i}, \underbrace{(-1)^i}_{Q_i}$ ($i \in \mathbb{F}_{11}$)

とおくとき, これらの張る \mathbb{F}_3^{12} の subspace

$\mathcal{C} := \langle C_\infty, C_0, \dots, C_{10} \rangle$ を ternary Golay code とよび,

$\{ \sigma : \{e_\infty, \dots, e_{10}\} \text{ に属する単項行列} \mid \mathcal{C}^\sigma = \mathcal{C} \}$

を \mathcal{C} の 自己同型群 と呼び $\text{Aut } \mathcal{C}$ と記す。

次に、複素数体 \mathbb{C} における 1 の原始 3 乗根 $\omega = -1 + \sqrt{-3}/2$ とし、 $\theta = \sqrt{-3}$ とおく。 \mathbb{Z} に ω を添加した ring $\mathbb{Z}[\omega] = \{ \frac{1}{2}(a + b\theta) \mid a, b \in \mathbb{Z}, a \equiv b \pmod{2} \} \cong R$ とおく。
 θR は R の ideal であり $R/\theta R \cong \mathbb{F}_3$, この代表系として $\{0, \pm 1\}$ がとれる。

今、3 元体 $\mathbb{F}_3 \cong \mathbb{Z}/3\mathbb{Z}$ を代表系 $\{0, \pm 1\}$ と同一視して \mathbb{Z} の subset と見なし、 $\mathbb{F}_3^{12} \subseteq \mathbb{Z}^{12}$ (整数成分の 1 行 12 列 $N \times 12$ の全体) $\subseteq R^{12}$ (R 成分の 1 行 12 列 $N \times 12$ の全体) の R -module とみる。この同一視のもとで、

(定義 2.) 次の R^{12} の subset を Complex Leech lattice とよび \mathcal{L} とあらわす。

$$\left\{ \begin{array}{l} \mathbb{O} + \theta\mathbb{C} + 3\mathbb{X} \\ \mathbb{I} + \theta\mathbb{C} + 3\mathbb{Y} \\ -\mathbb{I} + \theta\mathbb{C} + 3\mathbb{Z} \end{array} \middle| \begin{array}{l} \mathbb{X} = (x_i), \mathbb{Y} = (y_i), \mathbb{Z} = (z_i) \in R^{12} \\ \sum_{i=1}^{12} x_i \equiv 0, \sum_{i=1}^{12} y_i \equiv 1, \sum_{i=1}^{12} z_i \equiv -1 \pmod{\theta} \\ \mathbb{C} \in \mathbb{C} \end{array} \right\}$$

$$\text{と } \mathbb{I} = (1, \dots, 1)$$

また $\{ \sigma = \mathbb{Q}(\omega)$ 成分の 12 次ユニタリ 行列 $\mid \mathcal{L}^\sigma = \mathcal{L} \}$ を \mathcal{L} の 自己同型群 とよび、これを $\text{Aut } \mathcal{L} = \tilde{G}$ と書く。

\mathcal{L} は R^{12} の lattice ; 有限生成 R -module であり、 $\mathbb{Q}(\omega)\mathcal{L} = \mathbb{Q}(\omega)^{12}$; が示される。また order 6 のユニタリ 行列 $-\omega I \in \tilde{G} = \text{Aut } \mathcal{L}$ は明らかであるが、factor group $\tilde{G}/\langle -\omega I \rangle =: G$ は simple group であることを示される。

$G = \text{Aut}/\Lambda / \langle -\omega I \rangle$ と Sporadic Suzuki group と呼ぶ。

以下, G の基本的性質の幾つかと, その為に必要な ternary Golay code \mathcal{C} , complex Leech lattice Λ なるものに $\text{Aut } \mathcal{C}$, $\text{Aut } \Lambda$ の幾つかの性質と証明をなしに述べる。

(証明等詳しくは [27] と参照)

§3 諸性質

(1) ternary Golay code \mathcal{C} と, M_{11} の 12 点置換表現.

ternary Golay code \mathcal{C} は次の $3^6 = 729$ 個のベクトルから成る。

Weight	#	positive support	個数
0	①	\emptyset	1
6	① $\pm C_i + C_\infty = \pm(1^6, 0^6)$	$N_i \ (i \in \mathbb{F}_{11})$	11×2
	② $\pm C_i - C_\infty = \pm(1^6, 0^6)$	$Q_i \ (i \in \mathbb{F}_{11})$	11×2
	③ $\pm C_i \pm C_j = \begin{matrix} (a, b, c) \\ (1^3, -1^3, 0^6) \end{matrix}$	Ω の任意の 3 点 a, b, c	$\binom{12}{3}$
9	① $\pm C_i \pm C_j + C_\infty = \begin{matrix} (a, b, c) \\ (-1^3, 0^3, 1^6) \end{matrix}$	Ω の任意の 3 点 a, b, c	$\binom{12}{3}$
	② \mathcal{D} の negative.		$\binom{12}{3}$
12	① $\pm C_i = \pm(1^6, -1^6)$	$N_i \ (i \in \mathbb{F}_{11})$	11×2
	② C_∞ , ③ $-C_\infty$	Ω	1×2

\mathcal{C} の weight n のベクトル全体を \mathcal{C}_n と書く。 $\text{Aut } \mathcal{C}$ の元は

単項行列ゆえ, Γ の weight を変えぬ。従って $\text{Aut } \mathcal{C}$ は $\mathcal{C}_0, \mathcal{C}_6, \mathcal{C}_9, \mathcal{C}_{12}$ 上に作用するが, これらはすべて transitive となる。

特に $\text{Aut } \mathcal{C}$ は 24 変集合 $\mathcal{C}_{12} = \{\pm \mathcal{C}_i \mid i \in \Omega\}$ 上に transitive に作用し, 従ってその符号を無視して得られる 12 個の pair のなす $\mathcal{C} := \{\pm \mathcal{C}_0 \mid i \in \Omega\}$ 上にも transitive に作用する。

一方, 単項行列のなす群として $\text{Aut } \mathcal{C}$ は 24 変集合 $\{\pm \mathcal{C}_i \mid i \in \Omega\}$ 上, 従って 12 個の pair $E := \{\pm \mathcal{C}_i \mid i \in \Omega\}$ 上に (transitive に) 作用する。

E および \mathcal{C} への作用の核は $\langle -I \rangle$ であり, $M := \text{Aut } \mathcal{C} / \langle -I \rangle$ とおけば (M, E) は単項行列が Ω 上にひきおとす自然な置換群であり, $(M_{12}, \text{natural な } 12 \text{ 変})$ と置換群として同型である事が示される。(M_{12} は 12 次 Mathieu 群)

もうひとつの 12 変集合 \mathcal{C} 上の置換表現 (M, \mathcal{C}) は, 上の $M \cong M_{12}$ の自然表現とは同値にならない。実際, (M, \mathcal{C}) の 1 変 $\pm \mathcal{C}_0$ の stabilizer は, $\text{Aut } \mathcal{C}$ の中の置換行列全体のなす群 D と同型で, E 上可移となる事が示される。

この $\text{Aut } \mathcal{C}$ の permutation part D は, 抽象群としては, (M_{12}, E) の 1 変の stabilizer M_{11} (11 次 Mathieu 群) と同型となる事が示されるので, (D, \mathcal{C}) は M_{11} の 12 変置換表現を与える。

D の \mathcal{C} への作用により, 次の表 \mathcal{C}_0 の ①, ②, ③; \mathcal{C}_9 の ①, ②;

C_{12} の \mathbb{D} , $\mathbb{C}\alpha$, $-\mathbb{C}\alpha$ は γ の \mathbb{D} -orbit となる。

(2) Complex Leech lattice \mathcal{L} ; $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ および cross.

$X \in \mathcal{L}$ に対し, $g(X) = \frac{2}{9} \sum_{i=-\infty}^{\infty} |x_i|^2$ ($X = (x_i)_{i=-\infty}^{\infty}$; $|x_i|^2 = x_i \bar{x}_i$; \bar{x}_i は x_i の複素共役) とおいた二次形式 g を定義すれば, $g(X)$ は even integer で, $g(X) = 2$ とみたす $X \in \mathcal{L}$ は存在しない。すなわち, \mathbb{R} -module \mathcal{L} を \mathbb{Z} -module とみずして得られる \mathbb{Q}^{24} の lattice \mathcal{L}/\mathbb{Z} は g より導かれる二次形式 g' に対し, even lattice かつ $g'(X) = 2$ とす $X \in \mathcal{L}/\mathbb{Z}$ を持たぬ。更に \mathcal{L}/\mathbb{Z} は unimodular (i.e. g' に associate する双二次形式 $b_{g'}$ と書 (とき $\mathcal{L}/\mathbb{Z} = \{X \in \mathbb{Q}^{24} \mid b_{g'}(X, Y) \in \mathbb{Z} (\forall Y \in \mathcal{L}/\mathbb{Z})\}$) である事もわかる。従って, Conway [4] により $\mathcal{L}/\mathbb{Z} \cong$ Real Leech lattice となる。これは \mathcal{L} を complex Leech lattice と呼ぶ事の正当化である。

$\mathcal{L}_n := \{X \in \mathcal{L} \mid g(X) = 2n\}$ ($n=0, 1, 2, \dots$) とおく。
 $\mathcal{L}_0 = \{0\}$, 上の注意から $\mathcal{L}_1 = \emptyset$. 恒等計算により, $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ の vector の個数と形が求められる。

$$|\mathcal{L}_2| = 196,560, \quad |\mathcal{L}_3| = 16,773,120.$$

(定義 3.) \mathbb{R} -module \mathcal{L} の submodule $\theta\mathcal{L} = \{\theta X \mid X \in \mathcal{L}\}$ による factor module $\bar{\mathcal{L}} = \mathcal{L}/\theta\mathcal{L} = \{X + \theta\mathcal{L} \mid X \in \mathcal{L}\}$ を \mathcal{L} の mod θ の reduction とよぶ。 $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ の natural projection $p: \mathcal{L} \rightarrow \bar{\mathcal{L}}$ による image を $\bar{\mathcal{L}}_2, \bar{\mathcal{L}}_3$ と書(。

一般に, $X \in \mathcal{L}$ に対して, $p(X) = p(\omega X) = p(\bar{\omega} X)$ 及び $X \neq 0$ ならば $p(X) \neq p(-X)$ である事に注意する。

次の重要な Lemma が示される。

Lemma. $\bar{\mathcal{L}} = \{0\} + \bar{\mathcal{L}}_2 + \bar{\mathcal{L}}_3$ と分解される。

また, p は \mathcal{L}_2 上 3 対 1, \mathcal{L}_3 上 3-12 対 1 の map.

$\bar{X} \in \bar{\mathcal{L}}_2$ ($X \in \mathcal{L}_2$) に対し $p^{-1}(\bar{X}) = \langle \omega \rangle X = \{X, \omega X, \bar{\omega} X\}$.

$\bar{X} \in \bar{\mathcal{L}}_3$ ($X \in \mathcal{L}_3$) に対し, $X = X_1$ と含む \mathcal{L}_3 の 12 個の vector $\{X_1, X_2, \dots, X_{12}\}$ について, $p^{-1}(\bar{X}) = \{\langle \omega \rangle X_1, \langle \omega \rangle X_2, \dots, \langle \omega \rangle X_{12}\}$ とみえるものが unique に存在する。また \bar{X} に対応する双一次形式長に因り, X_i, X_j ($1 \leq i \neq j \leq 12$) は直交する。

例えば, $\forall i \in \Omega$ に対し $\mathcal{S}_0 := (\overset{c}{3}\overset{c}{0}, 0'')$ とおけば

$\mathcal{S}_0 = 0 + \theta \cdot 0 + 3(\overset{c}{0}, 0'')$ $\in \mathcal{L}$ であり, $h(\mathcal{S}_i, \mathcal{S}_j) = 0$ ($i \neq j$)。また,

$$\mathcal{S}_i - \mathcal{S}_j = \theta(\overset{c}{3}, \overset{j}{-3}, 0'')$$

$$(\overset{c}{3}, \overset{j}{-3}, 0'') = 0 + \theta \cdot 0 + 3(\overset{c}{1}, \overset{j}{-1}, 0'') \in \mathcal{L} \text{ 也}$$

$$\mathcal{S}_i - \mathcal{S}_j \in \theta \mathcal{L}. \quad \text{i.e. } p(\mathcal{S}_i) = p(\mathcal{S}_j).$$

従って, Lemma から $p^{-1}(\bar{\mathcal{S}}_{\omega}) = \{\langle \omega \rangle \mathcal{S}_i, \langle \omega \rangle \mathcal{S}_0, \dots, \langle \omega \rangle \mathcal{S}_{10}\}$

この $\{\mathcal{S}_{\omega}, \mathcal{S}_0, \dots, \mathcal{S}_{10}\}$ は \mathcal{L} における直交座標軸の集合ともいふべき自然な対象である。そこで,

(定義 4.) \mathcal{L}_3 の 12 個のベクトル X_1, \dots, X_{12} が

$$(1) \quad h(X_i, X_j) = 0 \quad (1 \leq i \neq j \leq 12)$$

$$(2) \quad X_i - X_j \in \theta \mathcal{L} \quad (1 \leq i, j \leq 12)$$

とみるとき, 2個の rank 1 の R -submodules のある unordered set $\{R_{X_1}, R_{X_2}, \dots, R_{X_{12}}\}$ を cross とよび, 各 R_{X_i} を axis と呼ぶ。

Lemma から, 任意の $X \in \mathcal{L}_3$ に対し X を含む cross は unique に存在する。例えば先の $S_{\infty} = (\infty, 0)$ を含む unique cross は $\{R_{S_{\infty}}, R_{S_0}, \dots, R_{S_{10}}\}$ である。この cross を Standard cross とよび, S とおこう。

\mathcal{L} の cross の全体を \mathcal{J} と書くと, $\mathcal{L}_3 \ni p(X_1), -p(X_1) \mapsto \{R_{X_1}, \dots, R_{X_{12}}\}$ (X_1 を含む unique cross) $\in \mathcal{J}$ により, $|\mathcal{J}| = |\mathcal{L}_3|/2 = 29 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 13$ である。

(3) Monomial subgroup, 行列 Σ , Q の order と simplicity.

以後 $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ のかわりに, その符号を無視した pair である集合 $\{\pm X \mid X \in \mathcal{L}_2\}$ 等を考え, これも同じく $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ と書く。 $\text{Aut } \mathcal{L}$ の元はユニタリ行列ゆえ, Σ を保つから $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ に作用する。 $O(\mathcal{L})$ も不変にするから, 本来の意味での $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ だけでなく, その符号を無視した $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ 上にも作用する。この核は $\langle -\omega I \rangle$ であり, $Q = \tilde{Q} / \langle -\omega I \rangle$ は $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ 上 faithful に作用。

\mathcal{L}_3 の 1 変 $\{\pm p(S_{\infty})\}$ をとれば, Q におけるこの変の stabilizer は, $\text{Aut } \mathcal{L}$ における standard cross S の stabilizer M の image $\bar{M} (\subseteq Q)$ である。 M をよび $\bar{M} = M / \langle -\omega I \rangle$ を monomial subgroup とよぶ。

$$M = \left\{ \sigma \in \text{Aut } \mathcal{L} \mid \begin{array}{l} \forall i \in \Omega \text{ に対し, } \exists j \in \Omega \text{ と } \psi \text{ は} \\ (R\mathcal{S}_i)^\sigma = R\mathcal{S}_j \end{array} \right\}$$

である。 $\text{Aut } \mathcal{L}$ は \mathcal{S} を保つから、 $\mathbb{Z}[\omega] = R$ の unit group $\langle -1 \rangle \cong \mathbb{Z}_2 \cong U$ と書くとき、 $\mathcal{S}_i^\sigma \in R\mathcal{S}_j \cap \mathcal{L}_3 = U\mathcal{S}_j$ 。

よって、 M は U 成分の単項行列となる。

\mathcal{L} の定義から、 \mathcal{S} の各 axis を σ により fix する M の subgroup D_0 は、 $D_0 = \langle -I \rangle \times D$ 、ここで D -群と記し $D \cong \mathcal{C}$ (ternary Golay code) という構造を持つ事がわかる。

$\mathcal{C} \ni \mathcal{C}$ に対し、行列 $d(\mathcal{C}) \in D$ と、次の $d(\mathcal{C}) \in (2, 2)$

$$d(\mathcal{C}) = \omega^{\mathcal{C}_i} = \begin{cases} 1 & \mathcal{C}_i = 0 \\ \omega & \mathcal{C}_i = 1 \\ \bar{\omega} & \mathcal{C}_i = -1 \end{cases}$$

成分とある対角行列として定義すれば、 $\mathcal{C} \mapsto d(\mathcal{C})$ が上の同型 $D \cong \mathcal{C}$ を与える。

また $\text{Aut } \mathcal{L}$ の元は \mathcal{L} 上への $\omega \in R$ の作用 (これは D の元 $\omega I = (\omega, -\omega)$ 従って上の対応を通じて $(1, -1) = \mathcal{C}_\infty$ なる \mathcal{C} の元と対応) と可換ゆえ、 $\text{Aut } \mathcal{C}$ における \mathcal{C}_∞ の stabilizer $P \cong M_{11}$ ($\text{Aut } \mathcal{C}$ の permutation part) に対応する置換群 (これも同じく P である) が $M \subseteq \text{Aut } \mathcal{L}$ 中にあるわかる。

実は、 $M = \langle -I \rangle \times (D_0 \times P)$ である。 $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ の M -orbit 分解を慎重に計算すると次の表の如くである。

Λ_2	代表元 $X=(x_i)$	$\{ x_{\infty} ^2, \dots, x_{10} ^2\}$	orbitの濃度
	(1) $(\underbrace{0^6}_{\Lambda_N}, 0^6)$	$\{3^6, 0^6\}$	$22 \cdot 3^5 \cdot 2$
	(2) $(\underbrace{0^3}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{(-\theta)^3}_{\Lambda_{T4}}; 0^6)$	$\{3^6, 0^6\}$	$110 \cdot 3^5 \cdot 2$
	(3) $(\underbrace{3}_{\Lambda_N}, \underbrace{-3}_{\Lambda_N}, 0^{10})$	$\{9^2, 0^{10}\}$	$3^2 \cdot 11 \cdot 12$
	(4) $(\underbrace{-2}_{\Lambda_N}, \underbrace{-2}_{\Lambda_N}, 1^{10})$	$\{4^2, 1^{10}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot \binom{12}{2}$
	(5) $(\underbrace{-2+\theta}_{\Lambda_N}, \underbrace{\bar{\omega}^5}_{\Lambda_N}; 1^6)$	$\{7, 1^{11}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12$
	(6) $(\underbrace{-2-\theta}_{\Lambda_N}, \underbrace{\omega^5}_{\Lambda_N}; 1^6)$	$\{7, 1^{11}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12$
Λ_3	表中: $T_1 = \{8, 6, 7\}$, $T_4 = \{0, 4, 3\}$	$T_2 = \{8, 10, 2\}$, $T_3 = \{1, 9, 5\}$	
	(1) $(\underbrace{(-\theta)^3}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{\theta^6}_{\Lambda_{T4}}, \underbrace{0^3}_{\Lambda_{T4}})$	$\{3^9, 0^3\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 5 \cdot 11$
	(2) $(\underbrace{\theta}_{\Lambda_N}, \underbrace{\theta\omega}_{\Lambda_N}, \underbrace{\theta\bar{\omega}}_{\Lambda_N}; \underbrace{(-\theta)^6}_{\Lambda_{T4}}, \underbrace{0^3}_{\Lambda_{T4}})$	$\{3^9, 0^3\}$	$2^4 \cdot 3^7 \cdot 5 \cdot 11$
	(3) $(\underbrace{\omega\theta}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{\theta}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{\theta}_{\Lambda_{T1}}; \underbrace{-\omega\theta}_{\Lambda_{T2}}, \underbrace{-\theta}_{\Lambda_{T2}}, \underbrace{-\theta}_{\Lambda_{T2}}; \underbrace{(-\theta)^3}_{\Lambda_{T3}}, \underbrace{\theta^3}_{\Lambda_{T4}})$	$\{3^9, 0^3\}$	$2^4 \cdot 3^6 \cdot 5 \cdot 11$
	(4) $(\underbrace{\bar{\omega}}_{\Lambda_N}, \underbrace{\theta^5}_{\Lambda_N}; \underbrace{3}_{\Lambda_N}, 0^5)$	$\{9, 3^6, 0^5\}$	$2^3 \cdot 3^3 \cdot 11$
	(5) $(\underbrace{\bar{\omega}}_{\Lambda_N}, \underbrace{\theta^5}_{\Lambda_N}; \underbrace{-3}_{\Lambda_N}, 0^5)$	$\{9, 3^6, 0^5\}$	$2^3 \cdot 3^3 \cdot 11$
	(6) $(\underbrace{\bar{\omega}}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{\theta^2}_{\Lambda_{T1}}; \underbrace{3}_{\Lambda_{T4}}, \underbrace{\theta^5}_{\Lambda_{T4}}; \underbrace{(-\theta)^3}_{\Lambda_{T4}})$	$\{9, 3^6, 0^5\}$	$2^4 \cdot 3^3 \cdot 5 \cdot 11$
	(7) $(\underbrace{3^3}_{\Lambda_{T1}}, 0^9)$	$\{9^3, 0^9\}$	$2 \cdot 3^3 \cdot \binom{12}{3}$
	(8) $(\underbrace{\theta^6}_{\Lambda_N}; \underbrace{-2\bar{\omega}\theta}_{\Lambda_N}, 0^5)$	$\{12, 3^5, 0^6\}$	$2 \cdot 3^5 \cdot 22 \cdot 6$
	(9) $(\underbrace{\theta^3}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{(-\theta)^3}_{\Lambda_{T4}}; \underbrace{-2\bar{\omega}\theta}_{\Lambda_N}, 0^5)$	$\{12, 3^5, 0^6\}$	$2 \cdot 3^5 \cdot 110 \cdot 6$
	(10) $(\underbrace{3^5}_{\Lambda_N}, 0^{11})$	$\{27, 0^{11}\}$	$12 \cdot 6$
	(11) $(\underbrace{1}_{\Lambda_N}, \underbrace{(-2)^5}_{\Lambda_N}, 0^6)$	$\{4^5, 1^7\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 132$
	(12) $(\underbrace{1}_{\Lambda_{T1}}, \underbrace{(-2)^2}_{\Lambda_{T4}}, \underbrace{(-2)^3}_{\Lambda_{T4}}, 1^3)$	$\{4^5, 1^7\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 6 \cdot 110$

代表元 $X = (X_0)$	$\{ X_{01} ^2, \dots, X_{i0} ^2\}$	orbitの濃度
(13) $(\underbrace{-2+0}_{T_1}, \underbrace{\omega^2}_{T_2}, \underbrace{(-2\omega)^3}_{T_2}, 16)$	$\{7, 4^3, 1^8\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(14) $(\underbrace{-2+0}_{T_1}, \underbrace{\omega^2}_{T_1}, 16; \underbrace{(-2\omega)^3}_{T_4})$	$\{7, 4^3, 1^8\}$	$2^2 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(15) $(\underbrace{-2-0}_{T_1}, \underbrace{\omega^2}_{T_2}, \underbrace{(-2\omega)^3}_{T_2}, 16)$	$\{7, 4^3, 1^8\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(16) $(\underbrace{-2-0}_{T_1}, \underbrace{\omega^2}_{T_1}, 16; \underbrace{(-2\omega)^3}_{T_4})$	$\{7, 4^3, 1^8\}$	$2^3 \cdot 3^6 \cdot 3 \cdot 110$
(17) $(\underbrace{-2+0}_{N}, \underbrace{\omega^4}_{N}, \underbrace{-2}_{N}, 1^5)$	$\{7^2, 4, 1^9\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 660$
(18) $(\underbrace{-2-0}_{N}, \underbrace{\omega^4}_{N}, \underbrace{-2}_{N}, 1^5)$	$\{7^2, 4, 1^9\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 660$
(19) $(\underbrace{-2+0}_{T_1}, \underbrace{\omega^2}_{T_1}, \underbrace{-2}_{T_4}, 1^5; \underbrace{-2-0}_{T_4}, \underbrace{\omega^3}_{T_4})$	$\{7^2, 4, 1^9\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12 \cdot 110$
(20) $(\underbrace{1+20}_{N}, \underbrace{\omega^4}_{N}, \underbrace{-2}_{N}, 1^5)$	$\{13, 4, 1^{10}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12 \cdot 11$
(21) $(\underbrace{1-20}_{N}, \underbrace{\omega^4}_{N}, \underbrace{-2}_{N}, 1^5)$	$\{13, 4, 1^{10}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12 \cdot 11$
(22) $(\frac{0}{4}, 1^{11})$	$\{16, 1^{11}\}$	$2 \cdot 3^6 \cdot 12$

更に,

$$U(v, j, k) := \frac{1}{\theta} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & \omega & \bar{\omega} \\ 1 & \bar{\omega} & \omega \end{pmatrix} \begin{pmatrix} v \\ j \\ k \end{pmatrix} \quad \text{とおき, 行列の直和}$$

$$\xi := U(0, 6, 7) \oplus \overline{U(8, 10, 2)} \oplus \overline{U(1, 9, 5)} \oplus U(0, 4, 3)$$

とすれば、これは 12 次ユニタリ行列であるが、 $\mathcal{L} := \text{span}\{\xi\}$ を保つ事を check される。すなわち、 $\xi \in \text{Aut } \mathcal{L} = \bar{\mathcal{L}}$ 。

上の $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ の M -orbit の代表元等と ξ を動かしてみることにより、 $\langle \xi, M \rangle$ は $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ 上それぞれ transitive と成る事が示される。特に、 $G = \bar{\mathcal{L}} / \langle -\omega I \rangle$ は、 $\mathcal{L}_2, \mathcal{L}_3$ 上 transitive であり、前に注意した如く、 \mathcal{L}_3 の実 $\{\pm p(\mathcal{L}_3)\}$ の G をおさる

stabilizer は $\overline{M} = D_0 / \langle \omega I \rangle \times P \cong 3^5 \times M_{11}$ (3^5 は order 3^5 の elementary abelian 3-group を表す。以後も使う。) であり,

$|\overline{L}_3| = |\mathcal{Y}| = 2^9 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 13$ かつ, G の order は,

$$|G| = |\overline{L}_3| \cdot |\overline{M}| = (2^9 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 13) \cdot 3^5 \times 11 \cdot 10 \cdot 9 \cdot 8 = 2^{13} \cdot 3^7 \cdot 5^2 \cdot 7 \cdot 11 \cdot 13$$

と定まる。(この \overline{L}_3 は符号を無視した新たな \overline{L}_3 である。)

更に, $\text{Aut } \mathcal{L}$ における $X = \left(\begin{smallmatrix} 6 & 2 \\ 3 & -3 \end{smallmatrix}, 0^0 \right) \in \mathcal{L}_2$ の stabilizer が, $D_1 = \{d(C) \mid C \text{ は } 6, 7 \text{ の support を含む } C \text{ の元}\}$, $P_{6,7} = \{g \in P \mid 6^g = 6, 7^g = 7\}$ 等と含む事から, G における X の stabilizer G_X の \overline{L}_2 ($196560/6 = |\overline{L}_2|$) への作用における orbit が求られ, その size は 1, 891, 1980, 2816, 6336, 20736. ($X \in \mathcal{L}_2$ に対する通常の内積 $X \cdot Y$ の値が $\langle \omega \rangle \theta, \langle \omega \rangle \theta^2, \langle \omega \rangle \theta^4, \langle \omega \rangle \theta^8, 0$ の 0 を除く (各々の値に対する $Y \in \mathcal{L}_2$ の全体に G_X は transitive. $X \cdot Y = 0$ なる $Y \in \mathcal{L}_2$ は 2つの G_X -orbit に分かれる。) この値から, (G, \overline{L}_2) が primitive であることがわかる。(従って, G_X は G の maximal group である!)

また, この事実と $\text{Aut } \mathcal{L}$ の元の固有値に対する簡単な注意により, あとは標準的な群論で G の simplicity が示される。

注意: 上の $X \in \overline{L}_2$ の stabilizer $G_X \cong U_5(2)$ である事は G の maximal local subgroup の分類が終了した段階でわかる。多分, もっと explicit に同型を確認できるであろう。

§ 4 Some 3-local in G

この § では前 § の準備がけから見つかる Maximal 3-local group の候補 (実際に maximal group を成す) を記述する。

前 § で見た通り, 対応 $C \mapsto d(C)$ を通じて ternary Golay Code C と $\text{Aut} L$ の subgroup D は $\text{Aut} C$ の permutation part P の作用も込めて同型であった。この P -orbit と C のこの表から $\bar{D} = D/\langle \omega I \rangle \subseteq G$ は P の作用で 2 個の orbits に分解する。代表元は $d(C_0) = \omega_0$ と $d(C_0 + C_j) = \omega_0 \omega_j$ の image である。 $|G|$ より, $\bar{D} \cdot P$ は G の 3-Sylow group と合分が \bar{D} の外側の元は $\bar{M} = \bar{D} \cdot P$ で 2 つの共役類に分解し, 前 § の元 ω により $\omega_0 \omega_j$ とある $\bar{M} - \bar{D}$ の元は fuse する。 $\text{mod} \langle \omega \rangle$ での行列の trace を比べればこうして得られる 3 つの $\langle \bar{D}, \bar{M} \rangle$ -class は fuse し去ぬ。 すなわち, G の order 3 の元は 3 つの共役類に分かれる。 $\omega_0, \omega_0 \omega_j \in \text{合分共役類}$ と $C_A(3A), C_A(3B)$, それひとつ $\in C_A(3C)$ と書 (時, 次が示せる)。

Lemma ([26] Prop. 1.5) G の 3-local group L に対して 次のいずれかが成り立つ。 $\underbrace{\hspace{10em}}_{\text{maximal}}$

$$(1) L = N_G(A) \quad \text{or} \quad A = \langle A \cap C_A(3A) \rangle (\neq 1)$$

$$(2) L = N_G(A) \quad \text{or} \quad A^\# \subseteq C_A(3C)$$

以下 (1) の形の 3-local について述べる。 $A \subseteq \bar{D} \cdot P$ としてよいから先の考察より $A \subseteq \bar{D}$ とある。 P の作用を考えるこ

とあり $\bar{\omega}_0 \in A$ としてよい。また $|A| \geq 3^2$ ならば $\langle \bar{\omega}_0, \bar{\omega}_1 \rangle \subseteq A$ としてよい。

$D \supseteq X$ に対して, X の axis 毎に fix する cross の全体を $\Phi(X)$ と書く。例えば $\Phi(D) = \{S\}$ であり, 前より, $S \in$ axis 毎に fix する $\text{Aut } \mathcal{A} = \bar{\mathcal{A}}$ の subgroup は $D \times \langle -I \rangle$ である。

簡単な計算より, $\Phi(\langle \omega_a, \omega_0, \omega_1 \rangle) = \{S, D_1, D_2, D_3\}$ である。
 ≥ 2 であり, S は standard cross, かつ D_1, D_2, D_3 は次の cross である。

$$T_1 = \{x, 6, 7\}, T_2 = \{8, 10, 25\}, T_3 = \{1, 9, 5\}, T_4 = \{0, 4, 35\}$$

とすると,

$$D_1 = \left\{ \begin{array}{l} R(\sqrt{T_0}, 0^?) \\ R(3, 3\omega, 3\bar{\omega}, 0^?) \\ R(3, 3\bar{\omega}, 3\omega, 0^?) \end{array} \middle| \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right. \quad \left. \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right\} \quad i=1 \sim 4$$

$$D_2 = \left\{ \begin{array}{l} R(\sqrt{T_0}, 3\bar{\omega}, 0^?) \\ R(3, 3\omega, 3, 0^?) \\ R(3\omega, 3, 3, 0^?) \end{array} \middle| \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right. \quad \left. \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right\} \quad i=1 \sim 4$$

$$D_3 = \left\{ \begin{array}{l} R(\sqrt{T_0}, 3\bar{\omega}, 0^?) \\ R(3, 3\bar{\omega}, 3, 0^?) \\ R(3\bar{\omega}, 3, 3, 0^?) \end{array} \middle| \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right. \quad \left. \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right\} \quad i=1 \sim 4$$

≥ 2 , $\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle \not\subseteq A \subseteq D$ とすると, $\exists \omega_i \in A (0 \neq 0, 1)$

であり, $\Phi(A) \subseteq \Phi(\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle) = \{S, D_1, D_2, D_3\}$ は明らか

かだが ω_i は $D_1, D_2, D_3 \in$ axis 毎には fix しない。

よって $\Phi(A) = \{S\}$ である。 $N_{\text{Aut } L}(A)$ は明らかに $\Phi(A)$ に作用するから S を stabilize し、従って $N_{\text{Aut } L}(A) \subseteq M$ 。 $Q = \text{Aut } L / \langle -\omega_a \rangle$ を考えれば $N_Q(A) \subseteq \bar{M}$ である。

従って、(1) の形の maximal 3-local は $N_Q(\langle \bar{\omega}_0 \rangle)$, $N_Q(\langle \bar{\omega}_0, \bar{\omega}_1 \rangle)$ または $N_Q(\bar{D}) = \bar{M}$ のいずれかに共役でなければならぬ。

$N_Q(\langle \bar{\omega}_0, \bar{\omega}_1 \rangle)$ の構造は、 $\Phi(\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle) = (S, D_1, D_2, D_3)$ への作用の核 (これは S を fix するから M に λ 子) $\in M$ 中では λ と見る事、及び 4-変数 $\Phi(\langle \omega_0, \omega_1, \omega_a \rangle)$ 上に A_4 が作用している事により定められ、 $\mathbb{Z}^{2+4} \rtimes \mathbb{Z}_2(A_4 \times E_4)$ 、 \mathbb{Z}_2 と同型群となる。

$N_Q(\langle \bar{\omega}_0 \rangle)$ の構造は次の様に求められる。 $\omega_0 = (\bar{\omega}_0^6 \bar{\omega}_0^7)$ の固有値 ω に対する固有空間と L の共通部分である rank 6 の sublattice $\Gamma = \{X \in L \mid X^{\omega_0} = \omega X\}$ 、更に Γ の mod θ の reduction $\bar{\Gamma} = \Gamma / \theta \Gamma = \{X + \theta \Gamma \mid X \in \Gamma\}$ を考える。 $\bar{\Gamma}$ は \mathbb{F}_3 上 6 次元の space であり、ここに L の二次形式 δ の Γ への制限 $\delta|_{\Gamma}$ を induce される二次形式 $\bar{\delta} : \bar{\delta}(X) = \frac{1}{2} \delta(X) \pmod{\theta}$ ($\delta(X)$ は even integer である。) を入れる。この二次形式 $\bar{\delta}$ は non-degenerate であり negative type である事を示される。 $C_{\text{Aut } L}(\omega_0)$ は $\bar{\Gamma}$ に作用し (ユニタリ行列 U など) を従って $\bar{\delta}$ を保つから、作用の核 Γ 内の大部分は $O^-(6, 3)$ の subgroup, 実はその交換子となる事から、核は $\langle \omega_0, \omega_a \rangle$ であることばかり、これから $C_Q(\bar{\omega}_0) \cong \mathbb{Z}_3 \cdot \text{P}\Omega^-(6, 3)$ となる。 ($-I$ は $O^-(6, 3)$ のスカラー-行列になる。) また P は $\omega_0 \in \text{invert}$

すゝ元があるから, $C_G(\bar{\omega}_0) \cong \mathbb{Z}_3 \cdot \text{P}\Omega(6, 3) \cdot \mathbb{Z}_2 \cong \mathbb{Z}_3 \cdot \text{U}_4(3) \cdot \mathbb{Z}_2$
 (よ(知らぬ大問型 $\text{P}\Omega(6, 3) \cong \text{U}_4(3)$.)

References

- [1] Bloom, D. M., The subgroups of $\text{PSL}_3(8)$, for odd q , Trans. Amer. Math. Soc., 127 (1967) 150-178.
- [2] Butler, G., The maximal subgroups of the sporadic simple group of Held, J. Algebra 69 (1981) 67-81.
- [3] Butler, G., in [6]
- [4] Conway, J. H., A characterization of Leech's lattice, Inventiones Math. 7 (1969) 137-142.
- [5] Conway, J. H., Three lectures on exceptional groups, "Finite simple groups", Academic Press, London, 1971. chap. III, 215-247.
- [6] Cooperstein, B., Maximal subgroups of $G_2(2^n)$, J. Algebra, 70 (1981) 23-36.
- [7] Curtis, R. T., On subgroups of $\cdot O$, I Lattice stabilizers, II Local structure, J. Algebra 27 (1973), J. Algebra 63 (1980) 413-434.
- [8] Dickson, L. E., Linear Groups, Dover, New York, 1958.
- [9] Enright, G. M., Subgroups generated by transpositions in F_{22} and F_{23} , Comm. in Algebra, 6 (8), 823-837 (1978).

- [10] Finkelstein, L., The maximal subgroups of Conway's group C_3 and McLaughlin's group, *J. Algebra* 25 (1973) 58-90.
- [11] Finkelstein, L., and Rudvalis, A., Maximal subgroups of Janko's simple groups of order 50, 232, 960, *J. Algebra* 30 (1974), 122-143.
- [12] Finkelstein, L., and Rudvalis, A., Maximal subgroups of the Hall-Janko-Wales group, *J. Algebra* 24 (1973), 486-493.
- [13] Hentley, R.W., Determination of ternary collineation group whose coefficients lie in $GF(2^n)$. *Ann. of Math.* 27 (1925) 140-158.
- [14] Janko, Z.A., A new finite simple group with abelian 2-Sylow subgroups and its characterization, *J. Algebra* 3 (1966) 147-186.
- [15] Lindsey, J. H., A correlation between $PSU_4(3)$, the Suzuki group and the Conway group, *Trans. Amer. Math. Soc.*, 157 (1971) 189-204
- [16] Maglovaras, S. S., The subgroup structure of the Higman-Sims group, *Bull. Amer. Math. Soc.*, 77 (1971) 535-539.
- [17] Mitchell, H. H., Determination of the ordinary and modular ternary linear groups, *Trans. Amer. Math. Soc.*, 12 (1911) 207-242.
- [18] Mitchell, H. H., The subgroups of the quaternary abelian linear groups, *Trans. Amer. Math. Soc.*, 15 (1914) 379-396.
- [19] Mwene, B., On the subgroups of the group $PSL_4(2^n)$, *J. Algebra* 41 (1976) 79-107.
- [20] Petrov, N and Tchackirian, K., The maximal subgroups of $R_2(4)$,

J. Algebra 76, 171-188 (1982)

[21] Suzuki, M., On a class of doubly transitive groups, *Ann. Math.* 75, 105-145 (1962).

[22] Tchakerian, K., The maximal subgroups of the Tits simple group
Comptes Rendus de l'Académie Bulgare des sciences 34, N°12 (1981).

[23] Wilson, R. The Quaternionic lattice for $2G_2(4)$ and its maximal subgroups, *J. Algebra* 77, 441-466 (1982)

[24] Wilson, R. The Complex Leech lattice and the maximal subgroups of Suz , to appear in *J. Algebra* (?)

[25] Wilson, R. personal communication

[26] Yoshiwara, S. 散在型鈴木厚純群の極大部分群について
東大修士論文 1982

[27] Yoshiwara, S. to appear

[28] Yoshiwara, S. to appear